
研究活動報告

特別講演会

マッシモ・リヴィバッチ「歴史的視点からみた少子化」

マッシモ・リヴィバッチ (Massimo Livi-Bacci) 教授が来日し、1月7日、本研究所で標記の講演をおこなった。リヴィバッチ教授は1936年生まれで、1966年以来イタリアのフィレンツェ大学で人口学の教授をつとめている。この間、国際人口学会 (IUSSP) 会長など国内外で多くの要職につき、現在、イタリア共和国上院議員、イタリア学士院会員、日本学士院客員をつとめている。ヨーロッパはもちろん世界の人口学のトップクラスの指導者の一人であり、欧州および世界の人口史の権威として知られ、とりわけ世界人口史を簡潔かつ統計学的に説明した *A Concise History of World Population* (1997年刊) は、欧米の大学・大学院における人口学の教科書・参考書として広く読まれている。

リヴィバッチ教授の研究業績は人口問題の幅広い分野にわたるが、今回の講演では先進諸国共通の問題である少子化について、歴史的かつ国際的視点からお話しいただいた。特に講演のポイントとして、(1) 必ずしも「低出生力=人口減少」ではなく、今日から見れば高い出生力でも、高死亡率や出移民のため人口が維持できないこともあった(逆もしかり) こと、また(2) 歴史的に見れば、出生力には相当のいわば「伸縮性」があることが指摘された。この2点は、現代の人口問題を考える上でヒントになるであろう。

当日は所内外から約50名の参加者があり大盛況であった。とりわけ河野綱果・麗澤大学名誉教授と明石康・ジョイセフ会長より貴重なコメントをいただいた。これを機に日本とヨーロッパ、なかでもイタリアとの研究交流が盛んになることが望まれる。なおこのたびリヴィバッチ教授に当研究所で講演をしていただくことができたのは、慶應義塾大学の速水融名誉教授ならびに津谷典子教授のご厚意による。厚く御礼申し上げる。(佐藤龍三郎記)

人口統計分析と将来人口推計：

ホンジュラス貧困削減戦略モニタリングシステム人材育成プロジェクト

本事業は、JICAの貧困削減戦略モニタリングシステム人材育成プロジェクトの一貫として行われたもので、ホンジュラス国家統計局 (INE) の統計専門職ならびに関係省庁の職員向けに人口統計分析の講義を行うと同時に、将来人口推計の実践を通じて人口の変動メカニズムに対する理解を深め、将来の人口構造を展望するための基礎的な知識と手法を習得してもらうことを直接的な目的としている。とりわけホンジュラスでは、来年実施が予定されている国勢調査の結果が公的な将来人口推計に用いられるという事情から、既存のデータを用いて人口分析と将来推計を行うことのできる人材の育成が急務とされており、それと平行して有効な推計に必要な調査票の設計や動態統計の整備も求められている。

これまで本国INEで行われてきた将来人口推計には、アメリカセンサス局の関係者が作成した推計プログラムが用いられている。現行推計の手法はデータの限られた環境下において用いられるもので、前回の国勢調査 (2001年実施) の結果をもとに2003年に推計が行われている。2001年国勢調査の結果